

きしわだ自然友の会・きしわだ自然資料館による 「地質の日」記念行事

渡辺 克典¹⁾

1. はじめに

初めての地質の日の翌日にあたる平成20年5月11日(日), 岸和田市立きしわだ自然資料館で開催された, きしわだ自然友の会総会記念行事について以下に報告する. この日は友の会の総会議事を午前中に終わらせ, 午後の予定はすべて記念行事関係に充てることとなった. 実習会と講演会は, 15分の休憩時間をはさみだけの過密なスケジュールの下でおこなわれ, おもに子どもや家族連れを対象にした実習会と, 一般向け講演会の2本立てで開催した. この二段構えの方式は, 京都大学総合博物館オリジナルの定評ある普及事業メニューであり, これまで多くの会場で同様の企画が展開されてきた経緯がある.

地学分野に関心が高い参加者の中には, 大野氏が講師を務める普及行事に参加したことのある人も多かった. 参加者を巻き込む「大野マジック」を知る人, またその噂を聞いた人たちは, 受講者との談笑を交えた楽しい展開を期待していたに違いない. そして, ひとつの行事が始まると, 期待以上の面白さに, 参加者の笑いは終始絶えることがなかった.

●実習会: 「三葉虫を調べよう」

日時: 2008年5月11日(日) 午後0時45分~2時45分
対象: 友の会会員限定(小学生を中心に/大人のみの参加も可)

●講演会: 「エディアカラの化石~最古の動物? の謎~」

日時: 同日午後3時~4時30分
対象: 一般(小学生以上)

講師: 大野照文氏(京都大学総合博物館教授)

1) きしわだ自然資料館・大阪府立三国丘高等学校
596-0072 大阪府岸和田市堺町6-5

場所: きしわだ自然資料館1階ホール

2. 実習会: 「三葉虫を調べよう」

まず「つかみ」を兼ねつつ, しかし基本的なことを子どもたちに考えてもらうべく, 大野先生が三葉虫とはどんな生き物か質問する. 最初なので反応が今ひとつつなのも想定範囲内. 大野先生は遠慮なく次々と子どもたちを当てて答えさせる. 子どもたちがどんな珍答をしても, 講師はさらに輪をかけた珍答で返す. 正確な知識伝達とユーモアの両立は, まさに名人芸. 大学の先生でも, 子ども(ほとんどが小学生)相手にここまで面白い話ができるという, 可能性の最大限を見る思いであった.

三葉虫の体の特徴や構造を説明するのにも, スライドや板書はもちろん, 大野先生らのグループが独自に開発した, 布製の三葉虫模型(脱皮もできる!)まで登場し, 会場は驚きの渦に(第1図).

続いて実物化石が各テーブルに配布され, 参加者



第1図 三葉虫の布製模型を手に説明する大野先生.

キーワード: 岸和田市立きしわだ自然資料館, きしわだ自然友の会,
「地質の日」記念行事



第2図 大野先生の「爆笑トーク」に沸く会場。

一同スケッチ開始。それぞれに書いた人の個性が出て、観察力や着眼点が如実にわかるから面白い。

もちろん作業中も大野先生の「爆笑トーク」は全開である(第2図)。さらに、こちらもオリジナル教材の『三葉虫を調べよう』改訂第1版を使用し、ワークシートのように書き入れて自分だけの資料ができあがる。

最初から最後まで子どもたちとの会話のキャッチボールが展開される。はじめは恥ずかしそうに答えていた子どもたちも、いつの間にか競争するように手を挙げて答えるようになる。間違ってもめげずに次々珍答を繰り出すので、そのたびに会場が沸いた。

行儀のよい模範解答に対しては、講師がわざと回答者を不安にさせるようなツッコミを入れて、「当然」と考えられがちな見解にも根本的な疑問を抱かせるよう仕向ける。正解している子には、一見かわいそうな仕打ちにも思えるが、最後には正解した子も誤答した子も、大きく包み込むようなまとめ方をし、そこに優劣はつけない。珍答を繰り返した子どもが「表彰」される場面もあり、笑いの中にも、考察するプロセスこそが何より大切、というメッセージが伝わってきた。

3. 講演会：「エディアカラの化石～最古の動物？の謎～」

わずかな休憩時間をはさみ、きしわだ自然友の会の千地万造会長(きしわだ自然資料館名誉館長)から長時間にわたる講師紹介ののち、講演の本編へ。

謎だらけの研究対象は実に面白い。昔とは違い、新事実が色々明らかにされてきたからこそ、さらに新たな謎が出てくるような世界である。たとえば、エディ

アカラの生物たちは、その形態が遠目にはシンメトリーに収まっているように見えるが、実は左右対象であり、エアマット状構造が互い違いに組み合わせられていることなどは、情報が古い市販の図鑑には載っていない。また、最古の軟体動物？と考えられるキンベレラの形態も生態も、やはり謎だらけである。タービダイト堆積物中にありながら、必ず同じ面を見せた形で化石が発見され、例外が全然ないというのだから驚きである。普通の貝化石なら、いくらか規則的に堆積している場合でも、個々は色々な方向を向くので、同じ面ばかり見えるなどということは到底考えられない。

そもそも、エディアカラの生物たちが生きていた時代の海底に広がっていた、当時の生態系の基盤になったと推測されるバイオマットの存在ですら謎めいている。当時の環境を想像し、風景を思い浮かべると、古生物の魅力に初めて取りつかれた子どもの頃のワクワク感が、リアルによみがえってくる。

4. 行事終了後

きしわだ自然友の会の評議員や、きしわだ自然資料館の職員らが集まる夜の懇親会へは、参加者の車に分乗し会場へ向かった。幸運にも筆者は大野先生と同じ車に乗ることになり、子ども対象の実習会について話が盛り上がった。実習会で受けた印象どおり、大野先生は子どもたちが自力であれこれ考えることを何よりも重視しているとのこと、単なるその場のノリなどではなく、確たるビジョンのもとに実行されている教育プログラムなのだ実感させられた。ただし、現在のスタイルに至るまで色々試行錯誤を繰り返したとのこと。完成度の高い普及事業は一朝一夕にはできないのである。

懇親会中はキンベレラ談義に花が咲き(無理矢理お付き合いさせ?)大人の「古生物オタク」が大野先生に食い下がっている様は、まさしく実習会でワイワイやっていた子どもたちと同じであった。子どもたちとの掛け合いから、最終電車が迫る飲み会まで、長々とお付き合いいただいた京都大学総合博物館の大野先生には、心から厚くお礼申し上げます。

WATANABE Katsunori (2009) : The memorial events of "Geology Day" produced by KISHIWADA Natural Party and Natural History Museum, KISHIWADA City.

<受付：2008年9月8日>